



TITLE:

『ダロウェイ夫人』一人生の悲哀

AUTHOR(S):

加茂, 映子

CITATION:

加茂, 映子. 『ダロウェイ夫人』一人生の悲哀一. 京都大学医療技術短期  
大学部紀要. 別冊, 健康人間学 2000, 12: 43-48

ISSUE DATE:

2000

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49579>

RIGHT:

## 『ダロウェイ夫人』

—人生の悲哀—

加 茂 映 子

*Mrs. Dalloway*  
—the Sorrows of Life—

Eiko KAMO

『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*: 1925) はヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf: 1882~1941) の4番目の長篇小説である。それまでにウルフは『船出』(*The Voyage Out*: 1915), 『夜と昼』(*Night and Day*: 1919), および『ジェイコブの部屋』(*Jacob's Room*: 1922) を出版している。

『ジェイコブの部屋』が出版された直後に、すでにウルフの頭の中には次に取り掛かるつもり作品『ダロウェイ夫人』のことがあった。ウルフは「私自身の仕事といえば『ダロウェイ夫人』のために営々と私のあたまの中のを網でさらひ集め、軽いバケツ何杯も取り出している。……この作品はたくさんの他の作品をつれてくるということにだんだんと気がつく」<sup>1)</sup>と日記の中で述べている。また、『ジェイコブの部屋』の世評をまったく気にしないではないが、「私の心の中では、自分自身の声で何かを言い始める方法を(やっと四十歳になって)発見したと信じてうたがわれない。このことが私にとっても興味があるので、賞賛をうけなくても前進できるように感じる」<sup>2)</sup>と述べている。

この「自分自身の声で何かを言い始める方法を発見した」というウルフの自覚が、何よりも『ダロウェイ夫人』を完成させる原動力になったと思われる。実際、10月14日の日記では『ダ

ロウェイ夫人』の構想が固まってきたことを「枝を張って」きたと表現し、「正常な人と狂気な人によって同時に眺められた世界—何かこうしたものを「事実」に即して書きたい」<sup>3)</sup>と書き留めている。

さらに、翌年(1923)6月19日には、この作品の中に「生と死、正常と狂気とを書きたい」と記している。このときは作品に「時間」という題名を与えている。「時間」は小説『ダロウェイ夫人』の全体に浸透している中心的観念であり、この時期にウルフが「時間」を仮題として考えていたことはうなずける。ウルフはつづけて「私は社会制度を批判したい。それが最も強烈に働いているところを示したい」<sup>4)</sup>というのである。

以下において、ウルフが書き表わしたいと考えたこと、すなわち「生と死」、「正常と狂気」および「社会批判」の観点から、この作品について考えたい。また、作品の主人公であり、表題となっているダロウェイ夫人の観点から、このことについて考えたい。

はじめに、ストーリーのあらましを述べよう。

第一次大戦も終わった1923年6月半ばの水曜日のロンドンが小説の舞台である。数カ月後に52歳の誕生日を迎えるクラリッサ・ダロウェイ

は、保守党の下院議員の夫人として今夕自宅でパーティーを開くことになっている。そのため彼女が花を買いに出かける午前10時半過ぎからパーティーがほとんど終わろうとしている深夜までの一日をこの小説は描いている。

しかし、この一日の中には、クラリッサやクラリッサとかかわりのある人々の過去の日々が「凝集」されているのである。たとえば、小説のはじまりでクラリッサは花を買いに家を出てさわやかな外気の中に「飛び込んで」ゆくが、そのさわやかさが直ぐに彼女に18歳の頃のことを思い出させる。ブアトン（イングランド西部）の屋敷で過ごした夏の朝にも、そんな外気の中へ「飛び込んで」いったものだった、と彼女は回想する。そして彼女の思いはあの頃の恋人ピーター・ウォルシュへとつながってゆくといいふに。

このピーターをはじめ、夫としてクラリッサが選んだリチャード、そしてクラリッサの旧知の、30年以上も前にブアトンの屋敷をしばしば訪れたヒュー・ウィットブレッド、クラリッサが「純粋で清らかな」愛の感情を寄せていた女性サリー・シートンらが30年余の歳月を隔てて、偶然に、あるいは招かれて一堂に会するのである。そして彼らはまるで過去の「時間」にひととき立ち帰ったかのように、思いに耽る。登場人物の心の内を描くのに、「と思った」という表現が頻繁に用いられる。たとえば、ピーターについては、彼はブアトンの屋敷でクラリッサに求婚を拒まれた後、失意の日々を過ごし、ここ5年ほどはインドに行っており、つい先頃帰ってきて、この日の昼前に突然クラリッサを訪ねたのだが、彼がクラリッサの家を出てから歩いてリージェント公園へ着くまでに「と思った」という言いまわしは25回も使われているのである<sup>5)</sup>。

ウルフは「心の襞に手探りしつつ匿名で出いりし、登場人物ひとりひとりを綿密に全く異ったものにする」「偉大なサイコロジスト」<sup>6)</sup>なのである。

またウルフは、登場人物の心の内にはいり込

んで描写するという、独特の方法について、次のように、これもまた独特の比喩を用いて述べている。

「時間」と私の発見について多くの語るべきことがある。私の人物たちの背後にどのように美しい洞窟を掘っているか、ということ。それはまさに私の欲するものを与えると思う。人間性、ユーモア、深み。私のアイディアとはそれらの洞窟をつながらせて、その一つ一つが現在の瞬間のあかるみに出てくる、というしくみのだ。……「トンネル掘り作業」と私が呼んでいるものを発見するのに一年間の模索を要した。これによって私は過去を必要に応じて分割払いの方法で語る<sup>7)</sup>。

このようにして、1923年6月13日の時間の中に登場人物の過去の日々が甦るのである。この甦りはほんの一瞬ではあるが、永遠の真実である。また人物の心のトンネルはつながり合っているので、人物相互の間に一瞬電流が走ることもある。

発見するのに一年を要したとウルフ自ら述べているこの技法を用いて展開される世界を、先に述べた三つの観点から考えてみたい。

#### ①生と死

小説の冒頭、ダロウェイ夫人はロンドンの外気に「飛び込んで」(10) いって「なんという晴れやかさ！」(10)と感じた。彼女は人生を、「神々しい生命力の波動」(15)を愛してやまない。この生への躍動感はブアトンで過ごした18歳の頃にはもっと激しく、「男性に対する気持ちとはちがい、大人になったばかりの女性同士の間にはしか存在しない特質の、完全に私利私欲を離れた」(51)サリーへの感情——一種の恍惚感——から「いま死ねば、このうえなく幸福だろう」(52) [『オセロ』(二幕一場)] とさえ感じさせたほどであった。すでに若い日々において、生への躍動感が死への想いにつながっていたのである。いま、52歳になろうとしている彼女は「愛しているのは目の前にあるこれ、ここ、いま。……死はすべての終わりにはちがい

ないが、なにかのかたちでこういったロンドンの街並みの中に諸々のものの干満に揺られながら、ここそこに生きつづけると信じられるならば、それはむしろ慰めになるのではないか」(18)と感じている。クラリッサにとって生と死は背中合わせにある。あるいは、彼女は生も死も希求している、といってもよいであろう。「さまざまな経験をなめながら晩年に達したこの世界は、すべての人、すべての男女の中に……涙と悲しみ、そして勇氣と忍耐、言いようもなく高潔で克己にみちた態度」(19)を作り出すことになったとクラリッサは思う。また、彼女が恐れるのは「時間そのもの。……年を追うごとに自分の人生の持ち分が薄くきりとられてゆき、わずかに残っている余白さえも、生活の色彩や刺激や雰囲気、もう若いときのように拡大したり吸収できなくなっていることを痛切に感じて」(46)いる。このように不安におののきながらも、常に「瞬間のまっただ中に飛び込む」(55)彼女は、今夜着るつもりの大好きな緑のドレスがほころんでいたことを思い出してクローゼットから取り出した。ウルフがクラリッサの「心の襞」に入っていく手腕はまことに見事である。「彼女の針はなめらかに絹糸を引っ張り、いったんおもむろに休止し、そして緑の襞を寄せ集めて、それをそっとベルトの部分に縫いつけるにつれて、静寂が静かな満足感をともなって降りてきた。夏の日波もそのように寄せて高まっては、平衡をうしない、そしてくだける。高まっては、くだける。……全世界がしだいに莊重さをましてゆく口調で「それだけのこと」と言いつづけているように思われてくる。そしてついには、浜辺で日の光をあびて横たわる肉体の中で、心までもが、それだけのこと、と唱和をはじめ。もはや恐れるな、『シンベリン』(四幕二場)と心が言う。もはや恐れるな、と。心はそう言いながら、その重荷をどこかの海に託する、すると海はあらゆる悲しみをひとつの悲しみとしてひきうけ、ため息をつく、よみがえり、出発し、たかまって、そしてくだけてゆく。」(59)ここに

はクラリッサと死との親しい関係が暗示されている。この死との関係の問題は②「正常と狂気」の問題と深くかかわりあっている。そして「正常と狂気」は第一次大戦にも深くかかわっている、これは③「社会批判」の問題ともなるのである。そしてこれら三つが別々のものではなく、つながりを持っていることは小説全体から読み取ることができよう。

## ②正常と狂気

この日の朝、ロンドン上空には、後部から吐き出す白い煙で文字を描きながら飛行する宣伝用飛行機の「不気味な爆音が群衆の耳の奥に侵入して」(34)くる。1923年といえロンドンが空襲に見舞われた、あの大戦が終わってまだ5年しか経っていない。この飛行機をリージェント公園のベンチに座ってスミス夫妻が見上げていた。

セプティマス・ウォレン・スミスはロンドン南西部の小さな町からロンドンに出てきた、詩人肌の、しかし人生に着実に取り組もうとしている青年であった。不動産業などを営む商会に職を得、支配人からもその能力を高く買われていた。第一次大戦で彼は義勇兵として真っ先に志願した。上官エヴァンズの注目、というより愛情を得た。エヴァンズは休戦の直前、イタリアの戦線で、炸裂した砲弾のためにセプティマスの目の前で死んだが、セプティマスは死を免れた。ミラノで休戦を迎えた彼は帽子造りの娘レイツィアと結婚した。ロンドンに戻った彼を元の職場の支配人は喜んで迎え入れてくれた。しかし、セプティマスは重いシェルショック(戦争神経症)<sup>8)</sup>のために、これから精神科医の診察を受けに行く途上にあり、いま公園のベンチに座っているのである。このサー・ウィリアム・ブラッドショーはナイトにも叙せられた名医である。

セプティマスは、公園の木々の葉のすべてが光沢を帯びて、青い色から波の緑色までたえず濃淡を変え、たえず上下に揺れている榆の木々の興奮を感じとる。「木々は手招きする。葉は生きている、木々は生きている。そして葉は何

百万もの繊維によって、ベンチに腰かけているこのほくの体とつながっていて、それを上へ下へと煽っている。枝がのび広がると、ほくの体も同じ動きをする。ばたばた羽ばたく雀たち、舞いあがり舞いおりながら交錯する雀たちも、黒い枝が縞模様をなす白と青の構図の一部なのだ」(35)と思う。

さて、診察したブラッドショーはセプティマスが「均衡の感覚」(138)を極度に欠いているとの診断を下し、ただちに療養所に入るように命ずる。セプティマスによればこの医師は「魂に評決を下す裁判官」(202)である。この辺りは語り手が前面に出てきて意見を述べる数少ない箇所である。神経病医を断罪するこの語り手の意見はウルフのそれに通ずるところがあると思われる。

セプティマスと同様に、クラリッサもまた「魂」の深みに降ったとき、木のイメージを思い描いた。「死がすべての終わり」と認識しながら、それでも自分は何かのかたちで生きつづける、と思ったときのことである。「たしかに私はブアトンの木々の一部、……ちょうど霧が木々に支えられるように、私のいちばんよく知っている人たちのあいだに、霧のように広がりながら、彼らの枝に支えられて、はるか遠くまで生き残ってゆく」(18)と。

さて、ブラッドショーに「評決」を下されて家に帰っているセプティマスを療養所へ入れるために、ブラッドショーの指示を受けたホームズ医師が迎えにきた。制止しようとするレイツィアを押しつけてホームズは階段を上がってくる。スミス夫妻はトテナム・コート・ロードから引っ込んだ横丁の家の上階に部屋を借りていた。ホームズが玄関のドアから入ってきたとき、そこから一番遠い奥のところまで追い詰められたセプティマスは「下の鉄柵めがけて」窓から身を投げた。そして致命的な傷を負い、救急車で病院に運ばれる。

パーティーの場にやってきたブラッドショーがこの自殺の一件によって遅れたと話しているのを、クラリッサは小耳にはさんだ。セプティ

マスとクラリッサは現実レベルでは何の関係もない。出会うことはないし階級も異なる。だからこのことを耳にしたクラリッサは最初「パーティーの中に死が入り込んできた。一体なんの権利があってブラッドショー夫妻は私のパーティーで死を話題になどするのかしら」(251, 252)と礼儀とわきまへのなさを心中非難する。これはパーティーの主宰者としてのダロウェイ夫人の思いを表明したものである。しかし、クラリッサの思いはすぐに心のより深いところへ降りてゆく。クラリッサには、その青年は死によって大切なものを守ったのだ、という気がしてならない。この青年は「それぞれの人生の中で汚され曇らされてゆくもの、一日一日の生活の中で墮落や嘘やおしゃべりとなって失われてゆくもの」(252)を守ったのだと思うのである。ブラッドショーがああ青年に「魂をむりやり支配すること」(253)をなしたのであれば、青年にとって「人生は耐えがたい」(253)のものであり、青年は自分の魂を大切に抱えて飛び降りたのではないだろうか、とも思う。彼女は「どういうわけか自分が彼に似ている気がする……彼がそうしたことをうれしく思う、生命を投げ出してしまったことをうれしく」(255)さえ思うのである。

五十歳を過ぎたクラリッサは自分の生がいつか終わることを知っている。しかし、その先に、木々の間の霧のように生き続けることを信じている。セプティマスは飛び降りて死んだ、パーティーを暗い影で覆った、けれども彼は魂の大切なものを抱きしめて守った、そういう意味ではこの死は永遠の生なのだ、と思う。クラリッサにあっては、生と死は心の深部では対立するものではなく、相照らすものである。正気と狂気もまた心の陰と陽の面なのである。

ウルフは、はじめはクラリッサを自殺させるつもりであった、と書いている<sup>9)</sup>。しかし、結局クラリッサに国会議員夫人としての社会的身分を保持させ、セプティマスにクラリッサの分身の役割を割り当てた。そうすることによって、社交界の夫人として生きるクラリッサと自

己の深層に降って生きるクラリッサとの双方を描き出そうとしたのであろう。

### ③社会批判

作品『ダロウェイ夫人』において、ウルフは社会への批判を目立たぬように諸所に書き込んでいる。最もはっきりと述べられているのは、魂に介入することへの批判である。

第一に「魂に評決を下す裁判官」と断ぜられた精神科医ブラッドショーに矛先は向けられる。サー・ウィリアムは「イギリスの狂人を隔離し、彼らが子をもうけるのを禁じ、絶望を罰し、生存不適者がおのれの見解を広めるのを不可能にする。……支配欲と権力欲に目をざらざらと輝かせている」(138, 139)と描かれている。クラリッサもまた、サー・ウィリアムの診察を受けたことがあった。「彼の診察は全面的に正しく、きわめて妥当なものだった」(251)けれども、彼女は彼に対して極度の嫌悪感を抱かずにはおれなかった。ウルフはサー・ウィリアムをとおして精神科医の暴虐、人間の創造性、情熱、想像力を押し潰そうとする暴虐を明るみに出そうとする。また、医師がいまこのような暴虐を振るっているセプティマスは、愛国心に燃えて志願兵として前線に出た結果、シェルショックの後遺症に苦しみ、心の傷を受けている。セプティマスをとおしてウルフは戦争を批判し、その害悪について訴えている。

魂に介入してくる第二のものは「宗教」である。これはミス・キルマンに体现されている。「歴史の専門家」(170) ミス・キルマンはクラリッサの一人娘エリザベスの家庭教師としてこの日の昼もダロウェイ家に来ている。彼女はフレンド教会の信者である。クラリッサにはキルマンの傾倒している宗教というものが「残虐なもの」(173)、いとわしいものと感じられてならない。クラリッサは「いままで私が誰かに自分の意見を押しつけようとしたことがあっただろうか。私はすべての人がその人らしくあることを願ってきたはずだ。」(173)と自分に語りかける。彼女にとって「宗教は事もなげに魂の独立を破壊する」(174)ものである。この考え

方はウルフの幼少期からの環境と関係があると思われる。

ウルフの父レズリー・スティーヴンは、神の存在は知り得ないとする不可知論者であった。子どもたちに洗礼も一切の宗教教育も受けさせなかった。ウルフ自身も神を信じなかった、というよりむしろ、信仰の重要性を標榜する人々の「他人の魂の中味にまで指をつっこんで得々としてこれをもてあそぶ連中の特殊ないやらしさ」を「ひとりの人間が他の人間を支配することや、指導することや、意志をおしつけることなど」<sup>10)</sup>を嫌悪した。

作品『ダロウェイ夫人』の中で弾劾されている精神科医をウルフ自身の経験と関係ずけてみよう。ウルフは少女の頃から何度か精神の健康を害して、神経科医の診察を受けてきた。1904年にははじめて安静療法を受けた。主治医は当時六十歳台の矍鑠たる社交家、サー・ジョージ・サヴィッジであった。ウルフは彼を「暴君のような」と評し、「医者というものは夫よりもたちが悪いもの」と書いている<sup>11)</sup>。ウルフは1910年夏7月から8月にかけて、ロンドン西部の郊外にある神経病患者を専門に扱う私設の療養所で6週間を過ごしたが、そこでは患者も職員も狭量で似非信者であった。このはじめての療養所体験以後、ウルフは療養所入りの兆しがさすと自殺をはかるようになった<sup>12)</sup>。

読者は、セプティマスをとおして明るみに出された、戦争が魂にもたらす害悪を実感するであろう。また読者は、女性の神経障害の原因の一部は、一個の人間として在りたいという女性の行動願望と、社会と家族から「女らしい」と規定される女性像にむりやりにでも自分を合わせようとする内的義務感との間の解決のない葛藤にあるのではないかと思いはじめるかもしれない<sup>13)</sup>。

作品『ダロウェイ夫人』における問題点のうち、①生と死、②正気と狂気、③社会批判について考えてみた。だがこれらがこの作品の中でウルフが書き表わしていることのすべてではない。眼を外に向ければ「自然」がある。「社会」

がある。内にはかけがえのない私の「心」がある。流れゆく「時間」の中に「生」があり、また「死」がある。この作品は「万人」に通ずるもの、それでいて「私」だけをつらぬく多くのものを蔵しているように思われる。

テキストは *Virginia Woolf: Three Great Novels: MRS DALLOWAY, TO THE LIGHTHOUSE, THE WAVES*. PENGUIN BOOKS (1992) を用いた。

なお、『ダロウェイ夫人』(丹治 愛・訳), 東京: 集英社 (1998) を参考にさせていただいた。「」で示した引用箇所後の ( ) 内の数字は頁数を示す。

### 注

- 1) ヴァージニア・ウルフ: ある作家の日記 (神谷 美恵子・訳), 東京: みすず書房, 1999: 68-69
- 2) 同書, 67-68
- 3) 同書, 75
- 4) 同書, 81

- 5) 前掲書, *Three Great Novels* の54頁から62頁までの9頁に *he/Peter Walsh thought* という表現が25回ある。「と思った」と書かなくても心の中を描出している場合は多い。
- 6) イギリスの心理小説 (内多 毅・監修), 東京: 東海大学出版会, 1985: 141
- 7) 前掲書, ある作家の日記 85, 87
- 8) この病気は, 最初は身近で破裂した爆弾のために起こると思われていたが, 近代戦が精神におよぼす累加的な緊張などによって起こる自制力, 記憶力, 発話能力, 視覚などの喪失症である。
- 9) 前掲書, ダロウェイ夫人 278
- 10) 前掲書, ある作家の日記 14
- 11) エレイン・ショウウォーター: 心を病む女たち (山田・蘭田・訳), 東京: 朝日出版社, 1990: 184
- 12) リンダル・ゴードン: ヴァージニア・ウルフ, 作家の一生 (森 静子・訳), 東京: 平凡社, 1998: 83
- 13) 前掲書, 心を病む女たち 184